

『新撰万葉集』の掛詞的表現の一覧とその分析

小橋 龍人

一、はじめに

本稿は新撰万葉集の掛詞的表現の一覧とその分析である。掛詞とは、同音異義であることを軸にことばに二重の意味を重ねた技法のこととするのが古くからの定義であるが、和歌研究では、同字で書かれていることを以って掛詞とみなす説がある。古今集時代に、仮名の發達に伴って、概念を別にする語が、同じ文字で書かれることを發見したことにより、この技法が發達したという認識である。論によつては、文字で書かれていることこそが掛詞ないしはそれを支える本質的な原理であるかのように説くものもある。

しかし、掛詞はそのような一面からのみ解されるべきものではない。

ひとつ目の理由としては、掛詞という技法は和歌のみならず、中世には謡曲などにも用いられていることがあげられる。そもそも近代における掛詞の研究は、謡曲の掛詞の抽出を、三代集でも行ったところより始まっている（木下子之吉「三代集中の掛詞の表」『帝國文学』一八九九年十月）。本来は掛詞は和歌の技法だけの問題ではなかった。

ふたつ目の理由としては、同字で書かれることだけを掛詞とすると、万葉集にみられる掛詞的表現の多くが中古の掛詞とは全く別の原理・発想によるものだととらえなければならなくなる危うさにある。つまり、掛詞発生の源流に、同音反復型の序詞を考えることも古くからされているが、こ

れとは全く質の違う表現に昇華したことになるのである。もしそうであれば、同音反復表現と掛詞表現のもつ質的な違いが問題となるはずである。

他にも、掛詞の原理に、和歌の基本的な原理である人事と物象（あるいは心と景）の対応をみる説もあるが、ことばを分析するとまれに物象と物象を掛けたものもあり、人事・物象という対比を掛詞の原理に据えることも難しい。この観点からいうと、季節と心が「うつろふ」ことや、「女郎花」がただちに女を意味するといった、心物の融合したような表現はすべて掛詞ともいえてしまうわけである（この視点は、神作光一編『八代集掛詞一覧』の解説における長谷川哲夫の「解説」での批判が示唆に富んでいる）。

そもそも「掛詞」という用語自体が近代の用語であるのだから、「掛詞」という概念でことばを括ること自体が古代の和歌にとっては適切といえるかどうかという問題も抱えているはずである。その考えを深める端緒としても、同音を基本にする、すなわち旧来の意味での「掛詞」という視点から表現を分類してみることは、今後の学問・研究の発展の一つの段階として、試みられてよいのではないか。本稿が題目を「掛詞的表現」としている理由はここにある。

そもそも、和歌における掛詞の研究が古今集を中心に行われていることには、大きな問題がある。その直前に成立している新撰万葉集の掛詞の在り方が全く考慮されていないのである。

新撰万葉集の成立は上巻が寛平五年（八九三）、下巻が延喜十三年（九一三）とされている。延喜五年（九〇五）成立の古今集の前後に位置づけられる。そして周知のようにこの歌集の歌は漢字によって書かれており、ふんだんに訓が用いられている。本稿の一覧では明らかとなつていますが、掛詞部分を調査すると、そのほとんどは訓を用いたものである。同字の掛詞は二、三例しかない。掛詞を同字によって書かれるという立場から定義するのであれば、新撰万葉集ではほとんどが掛詞と認定できない事態となる。

例えば、古今集で「あき」と仮名により表現される「秋・飽き」の掛詞は、新撰万葉集では「秋」の一字で記される。本集においてそれらの掛詞が掛詞といえる根拠は「秋」が「あき」と訓まれることにある。掛詞の構造は、そこからのことばの転換として「飽き」なる観念が連想されるという過程をもっていることになるだろう。「秋↓アキ（音）↓飽き」という認識の過程があるとみるのか、はたまた古今集成立以前にすでに「秋≡飽き」であるという観念が成り立っているのか、他にもさまざまな認識が考えられるだろうが、少なくとも新撰万葉集は、古今集で獲得されたといわれる、同字で書かれたものという掛詞の在り方の片鱗がほとんどみえないのである。

新撰万葉集と古今集、歌における真名から仮名という流れについて、この表記の変化が急速に起こったとする見解は、竹内美智子「女手と和文」〔『平安時代和文の研究』明治書院、一九八六年〕に述べられている。反対の立場として、物名などを参考に、六歌仙時代（つまり新撰万葉集成立より前）から仮名で書くことが行われているとする平野由紀子「仁明朝の和

風文化と六歌仙——掛詞・物名・竹取物語——」（増田繁夫ほか編『古今和歌集研究集成』巻一、風間書房、二〇〇四年。のち『平安和歌研究』風間書房、二〇〇八年）の論もある。だが、本稿者は一樣に真名書きから仮名書きへ和歌の書記様態が変化したとは思わない。また、すべての和歌が新撰万葉集以前に仮名によって書かれていたとも考えない。仮名での書き方が成熟する段階（これは古今集の成立期ということでもある）においても、真名での書き方も存在していたであろうと考える立場である。同字で書かれるという掛詞発生在り方を相対化することの根拠は、新撰万葉集の掛詞を考えることで、より明確となるであろう。年代的にも、古今集は真名書き和歌に挟まれている。撰集というのはその時代以前の和歌を集めるものであるから、この古今集前後の和歌の時代に、両様があり得たということは資料的には考えられるわけである。

このように、古今集と同時期のこの歌集に、同字でなく、訓を用いた掛詞が相当数あるということは、掛詞を考える上で、仮名書き以外の掛詞の原理を分析することを可能にする。同字の掛詞を相対化できるのである。特に新撰万葉集は、古今集と同じ歌であっても、掛詞を仮名の同字ではなく、漢字の訓によって表現しているのである。このことからすれば、仮名の同字を掛詞の原理に置くことが適切とはいえない。

当然、同字による掛詞（音韻の清濁を無視した掛詞——「なかる」に「流る・泣かる」を掛ける種類のもの——が存在するのは事実であり（これは新撰万葉集にもみえる。一覧参照）、この種類のものが一定数みえること）によって、掛詞が書記を原理とする説はもつともらしく言われている。だが、書記されたことが原理となるのであれば、その時に歌にとって重要と

いえるはずの「音」がどのように捉えられたのかについても、文字・書記との関係で説明する必要があるだろう。

最初に簡単に触れた通り、掛詞は結局のところ、謡曲などにおいて音声的要素を発展させながら継承された。後世まで射程にいられた表現の在り方を考え、その技法の本質を考察する必要もある。そしてそれ以前の万葉集の掛詞的表現の在り方、同音反復との関係もまた、説明されなければならぬ。その際、古今集と同時代の新撰万葉集の掛詞——これのほとんどが同字でなく、訓を主体としているという点——からすれば、書記されることが掛詞の原理とはいにくくなるのである。同音式で理解できるものは同音式で理解された余地が十分あるのであり、同字式の場合は、その同音式の掛詞を踏まえての当時の先端的な用法ということも考えられてくるだろう。そうなれば、同音の点に原理に持っているというのが掛詞の基本・原則であるということが、同時代の表現としても考えられてくるわけである。

なお、本稿は二〇二三年に古代文学会九月例会で発表した「古今集の掛詞が成立するまで——新撰万葉集における掛詞から見た場合」の基礎調査をもとにした原稿である。その中で、分析中において、掛詞を考える上で重要な視点がいくつも発見された。そのため、一覧表とし、さらに掛詞を考察する上で重要と考えられる視点を指摘するものである。掛詞原理の理論部分については、別の機会に提出することを考えている。

掛詞をただ一覧にするだけでは、テキストがデータベースによって簡単に利用できる今日では存在意義が薄れているため、新撰万葉集における掛詞の分析の結果も合わせて載せることとした。

掛詞とはそもそもどういふものかの判断も揺れている現状の研究の段階ではあるが、従来の掛詞とは異なる視点、また、いくつかの例では、古今集で行われている歌の解釈を変える指摘も分析の結果あらわれてきたので、ここに稿を成した次第である。

二、分析の結果と、それについての見解

本分析によって発覚した事実と、それについての見解について述べる。今回の分析過程で判明したのは、新撰万葉集の掛詞は漢字の音表記でなく訓表記を用いたものが大半であることである。つまり、掛詞の大半が漢字の読みから連想される同訓を利用したものになっている。これは漢字に結合する音を介さねば掛詞にならないことを示唆する。

また、この「音を介する」というのは、文字と結合した音を介しているという意味も含んでいる。文字がまだ音から独立していない面があるということである。「秋」から連想される「阿」「支」という文字があるのだとすれば、それはそれぞれ「あ」「き」という音価を持ったものという認識が前提されているわけである。これはつまり「阿」「支」が音を媒介しないで即「あ」「き」という文字概念そのものを連想させるわけではない。表記が音から独立したという段階には達していないということである。それがこの時代の掛詞の一面にありうるということである。

また、掛詞が漢字を使って表わされていることにより、文脈において、その掛詞の漢字の表意性が問題になるが、分析すると、それらは下接する文脈に対して掛詞の漢字の表意性が合致するものが大半を占めている。上の文脈とその漢字の表意性が合わないということは、文章としては不自然

という他ない。あるいは不自然な箇所であるからこそ、掛詞であるという指示になっているとも考えられる。

この二点目は特に重要な視点である。古今集を対象とした掛詞論では、分析対象が仮名で書かれていることを基本とするために、文脈への依存関係は、ことばの意味から考えなければならなかった。しかし、字の表意性という観点から、同時代の掛詞の発想法の一端、つまり掛詞は下の文脈に対して特に従属する（させる）と認識されていた可能性のひとつがうかがえるのである。

三つ目としては、後世の八代集の中に見える稀少な掛詞（注釈書によっては掛詞と認めないものが多いもの）と一致するものが新撰万葉集にみえている点があげられる。仮名で書かれている場合は、掛詞に何がかかっているかの判断が難しい場合が多い。そのため客観的な分析の対象になりにくいところがあった。しかし、新撰万葉集では、漢字表記が意味を喚起させるために、何が掛けられているかという、掛詞の意味の判定において、漢字の表意性からの客観的な指摘が可能になってくる。それによって、掛詞であることが明瞭になっているものが少なくない。後世の八代集でも、一部の注釈書が指摘するのみで、一般には掛詞とは認められていないものでも、新撰万葉集の掛詞では、漢字の表意性によって示されているものがある。

このように、仮名で書かれることによって平板となっている掛詞とは違った掛詞分析の視点があったことが明らかとなるのであった。

これをもとにすれば、万葉集の掛詞的表現の在り方の分析も、より形態の面から試みることができるであろう。それは、上代から中古の表現の継承の問題を明らかにすることに繋がる。そこから新撰万葉集を経過して、

古今集の掛詞がどのような質を持っているかについても、相対化して論じることができるようになると考えられる。

三、一覽表の凡例

調査で利用したテキストは以下のものである。

・新編国歌大観所収テキスト（底本…寛文七年版本）

現在の流布本といえる上記テキストを用いた。ただし、訓に関しては『契沖全集』第十五卷（岩波書店、一九七五年「雑抄 書入一」）所収の版本の訓と書き入れも参照し、特筆すべきものはそれも明記した。

他、参考としたのは次の書籍である。

・新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』巻上（一）（二）（和泉書院、二〇〇五～二〇〇六年）

・半澤幹一・津田潔『対釈新撰万葉集』（勉誠出版、二〇一五年）

しかしながら、両書が指摘しない掛詞的表現はかなりの数にのぼる。それらは次の書籍を参照して認定の参考とした。

・神作光一編『八代集掛詞一覽』（風間書房、二〇〇二年）

同書は五十数書に及ぶ八代集の諸注釈書の掛詞の指摘を集めたものである。参考となるところ大であった。

他にもいくつか、部立からだけでなく、歌一首の意味から掛詞と認めるべきものは私に補った。先行研究において、人事と物象の対応、同音同義的でありながら文脈により意味が乖離しているもの、本来は同根の語を如何に捉えるかという問題は提出されているから、その問題も検討の対象と

なるように、「掛詞」をひろめにとって「掛詞的表現」とした。当然ながら、同字で書かれたもののみを掛詞と見なすのであれば、新撰万葉集には掛詞は二、三例しかないことになるため、訓に返した場合の音から帰納されるものを中心に認定している。

「秋(飽)」とは「秋」字で表記され「飽」の意味を掛けているという点とであり、「飽(秋)」は逆に「飽」字で表記され「秋」の意を掛けていることを示す。下接する数字は新編国歌大観の歌番号である。どの歌がその表記なのかを示す。

四、新撰万葉集の掛詞の一覧

あき〔秋(飽)〕101・121・143・155・237・351・376・396・494・514・546・550〔飽(秋)〕368)……大半が「秋」字で表記。そのために文脈上「飽き」のニュアンスが見えない歌も多いが、「心・移」などと同時に使われている例では掛詞の認められる可能性が高い(351・514など)。しかし、「秋=飽」の観念が成り立っているならば、97や113などもかけられていると判断すべきに思われてくる。その上で考えるならば、538も掛詞となる可能性がないわけではない。368はかなであれば「秋」を縁語的に見出せるであろうが、表記が唯一の例外となっている点からすれば、これは掛詞的なものと認めない表現の論理が働いているという見方もできなくはない。掛詞に挙げなかった他の「あき」の例は95・97・109・113・329・372・508・524・528・534・538・548。あふ〔逢(逢ふ・吊り合ふ)〕211)……この例は表記と関わって特殊な例であるので、「はかり」の項で一首全体の説明として取り扱った。そ

の項を参照。

あらし〔荒芝(荒し・嵐)〕372)……新撰万葉集では他に「嵐」と書く例で「あらし」と読みうるもの(420)がある。

いとはれて〔被厭手(厭はれて・いと晴れ)〕217)

いろ〔色〕155・199・259・534)……すべて「色」。人事と物象で意味を重ねて使うのが主なので、掛詞とは認定しないのが一般的であるが掛詞的表現」として挙げた。全て草木の色と、人の心の色とで対比している。人事と重ねられているとわかりやすいのは、155・199・199は「下丹通手(下に通ひて)」が前の文脈と後ろの文脈を重ねる結節点となっており、人事と物象とが対照されている。他は掛詞とはいえないが、259は春歌にもかかわらず「つねならば」「かたみ」の語から相手の訪れを待つ恋意が含意されていると考えられるので、挙げた。他は掛詞からはかなり離れているとも考えられるが、7・25・105・131・135・185・197・237・255・281・360・364・458。ただし25は人事との重ねであり、「うつろふ」項参照)、237は「あき」「うつろふ」と同時に使用されている点からは、掛詞的である。

うき〔浮(浮(草)・憂き)〕402)

うすし〔薄(蟬の夏衣が)薄し(人の心が)薄し)〕43)……これは掛詞と認定されやすい語だが、構造的には物象と人事の重ねの用法である。

うつろふ〔移徙)7〔移徙)237・351〔移)514)……『八代集掛詞一覽』の解説(本稿の一頁参照)でも触れられている通り、この語は一般的には掛詞とは認定されていない。しかし、人事と物象の重なりを表す詠法としてよく使われるもので、構造的には掛詞の在り方と共通していることが同解説で指摘されているので掲げた。237は恋歌であり、514は恋

の文脈を想起させるので含めた。9・153は物象の文脈のみのためここに挙げなかった。

うら〔浦(心)〕400・446・480)……〔浦〕に心の意味の「うら」を掛ける。400は冬歌であるが「音だにもせず」から人事の意を読み取れる歌であり、訪れて来ない、手紙もよこさない相手の心の冷たさを詠んでいることになるので、掛詞に認定した。

おもひ〔思(思ひ・火)〕79・179・464・478・482)……仮名では「おもひ」と書かれるので「ひ」から「火」が連想されるというのは容易に理解されるが、「思」の字だけから「火」が連想されているのが新撰万葉集である。この掛詞を考える上で注目すべきは213である。この歌は、直接には「思ひ・火」の掛詞を使っていない(初句「人緒念」(ヒトヲオモフ)とはなっている)が、発想としては明らかにそれを踏まえて詠んでいる。「思・念」という観念が「火」と結合していることを思わせる。つまり「ひ」とわざわざ仮名を思い浮かべずとも、この語自体に「火」のイメージが含まれているということになる。しかし、79は「夏草之繁杵思者 蚊遣火之下丹而已許曾 燃豆芸礼(なつぐさのしげきおもひは かやりびの したにのみこそもえわたりけれ)」となっており、「思」とあるそれは「蚊遣火」の「火」だと、景物を持ち出して冗長に詠みあげているため、「思=火」を連想させる前段階の在り方があったことを思わせる。

かかる(「如此留(斯くある・掛かる)」390)……露は草葉・糸に掛かるものだから、それと対応して、縁語的に掛詞となっている。

かさ〔笠(笠・笠取山)〕135)……〔雨降者笠取山……〕とあって、序詞・枕詞に近い用法だが「たち別れいなばの山」(古今・離別・365)のよう

な連鎖式の掛詞である。

かたみ〔片身(形見・籠)〕21)・〔方見(形見・籠)〕273)……273は「摘む」とあるので「籠」を掛けているのは明らか。21もその春の文脈でいうと掛詞の可能性があるので挙げた。

から〔幹(殻・から(助詞))〕219)から〔雁(雁・カリ(音))〕368)……これはキキナシというべきもので、

掛詞とはいいいくいが掲げた。「雁」が「カリ」の名を持つのはその鳴き声に由来するはずだが、それを再発見している。キキナシの例は他にも新撰万葉集中にみえる(「きりきり」など)。

かりがね〔借金(衣を) 借り兼ね・雁音)153)……古今集にも載る(秋上・21)。従来から古今集で指摘されている掛詞に加え、表記においては「借金」という、和歌では一般に想定されにくい字づらであらわされている。なお、「兼ね・ゝが音」において清濁が異なるから、仮名であらわすべき「同字」の掛詞が前提になっている例とすることもできる。

かる〔枯(離)〕396・424)……古今集でも常套のこの掛詞は新撰万葉集では二例。「草裳木裳 枯塗冬之 屋門成者 不雪者 問衣裳無」(くさもさも かれぬるふゆの やどなれば ゆきふみわけて とふひともし) (424)の一首は、枯れた冬の宿なので人の訪問もない(ということとは「離る」という形。一語に二義を持たせた、古今集的な掛詞ではなく、義を先に示して、文脈から掛詞であることを補強している例である。結局その人が訪わない点から「枯」に「離」の意が認め得ることを説明していることになる。ということはこの例は「枯」と「離」が観念として結合しているわけではないともいえる。二首が同じ形であるということは、新撰万葉集が編纂されたごく近い時代にあらわれた、新しい種類の掛詞

であった可能性もある。古今集では常套の掛詞となつてゐるのだから、ここから十数年でことばの認識の変化が起つてゐるといえるだろう。古今集時代の表現の微細な変化・差異は、新撰万葉集での表現の在り方をみつめることで、より詳細にみえてくる可能性を秘めている。一首目の「秋来者 草木雖枯 吾屋門者 繁里増留 人芝不問禰者」(あきくればくさきかるれどわがやどはしげりまされるひとしとはねば)(396)は、枯れるけれども我が家は茂りまさつてゐる。人が訪問しない(ということは「離る」という形で、意味の上で重ねてゐる。いわゆる「響かせてゐる」用法にみえるが、ここに含めた。

き「来(来・着(る))」137)

きえかへる(「銷還(霜がすつかり)消え・(心がすり減つて)消え」181)……これも掛詞ではないが同語を物象と人事の両用に重ねた表現。きく「菊(菊・聞く)」358)……「音にのみ聞く」は古今集(恋一・470)にもあるが、この掛詞のみ、訓ではなくて漢字音に拠つてゐる。但し「しらぎく」の語法も古今集には多いから、当時は訓的なものと見なされていたことも考えた方がよい可能性はある。

きりきり(「切切」99)……ききなしの例。

きる(「服(切る・着る)」141)……「錦裁服」とある。古今集にも載る歌(秋下・396)だが、「着る」を掛詞と認める注釈書は少ない。ただし、新撰万葉集の用字はあきらかにその意を含んでゐる。「服」で「きる」と訓ずる例は、他に111(「錦緒曾服」(にしきをぞきる))、115(「虫之織服 衣緒曾飯」(むしのおりきるころもをぞかる))とみられるから、この意味でこの掛詞は正しい。すると古今集の歌の解釈に変更が求められてくる可能性が発生する。しかし、そのように考えると、逆に本来こ

の部分に「切る」の意味が含まれてゐるか(掛詞か)を疑うこともできる。「断ち切る」ではなく「断ち、着る」が当時の意味だったということである。その場合は古今集でも新撰万葉集でも、この「切る」は掛詞にならないということになる。

さく「(拆(花咲く・波さく))」265・428)……波の「さく」と花の「咲く」の掛詞は「我が宿の池の藤波さきにけり山ほととぎすいつか来鳴かむ」(古今集・夏・一五三)に指摘する注釈書もある。一首は「白妙之浪道 別手哉 春者来留 風立毎丹 花裳拆芸里」(しろたへのなみちわけてやはるはくるかぜたつことにはなもさきけり)、「浦近杵 前丹波立 冬来者 花拆物砥 今曾知塗」(うらちかきさきになみたつふゆくればはなさくものといまぞしりぬる)と一首中に波が配置されているので掛詞的に響かせてゐる可能性が高い。なお、花が「咲く」を「拆(割る・開く)」と表記するのは、言葉の原義にさかのぼつてゐる用法。本来、古代の語の捉え方では、地などを割つて、植物などの生命力が最高の状態となつて、そこを破つて出て来ることであつた。新撰万葉集の表記はそれに立ちかへつてゐることが注意される。中古和歌に上代的な古代性が看取される好例といえる。

さみだれ(「沙乱(さ乱れ・五月雨)」47・307)……これも掛詞と認める場合は少ないが、表記からは乱れる意がよくなつてゐるので含めた。さゆ(「冷(霜が)さゆ・(自分が)さゆ」159)「牙(霜が)さゆ・(自分の衣が)さゆ」231)……これも掛詞とはいいいがたいが、人事と物象の重ねの用法。

しがらみ(「志加良三(柵)」490)……これも、人事と物象の重ねの用法。しげし「繁」79・83、「繁佐」462)……どの例も「草が」繁し(茂つ

ている)・(心が)繁し(激しい)」の掛詞で、人事と物象が重なっている例。掛詞的ではないが「しげる」などの形を含めると、他に391・309・396・440の例が挙げられる。396などは掛詞とみとめてもよいかもしれない。

そら (「暗(暗・空)」454)

たちかくる (「立翳礼(立ち隠される・立ち隠れる)」540、「立隠」512)

……女郎花にかけて、女が立ち隠れる像と重なっている。

たちかへる (「立還(霞が)立ち還る・自分が繰り返し見て)立ち還る」17、「立還(立ち還る)・(波が)立ち(寄せては、還る)」147)……
「」は人事と物象の対照の例といってもよい。二首あり、表記も同じだが、全く違うものに使っている。そもそも、どちらも主体が転換しているためにニュアンスが大きく変わっているだけで、意義的には変わっていないともいえる。次の「たつ」がバリエーションに富んでいることと重なる。

たつ (「起(霞が立つ・雁が立つ)」27、「起(霞が起つ・春が立つ)」31、「立(鳥が鳴いて立つ・春が立つ)」59、「竜(田山)(秋霧が立つ・立田山)」133、「起(霞が起つ・人が立つ)」249、「立(霞が立つ・花見に行く・心が立つ)」251)……新撰万葉集では他の掛詞にないほど多様に富んでいるのが「たつ」である。古代語では、原義として、何かがあらわれる現象と解釈されているので、本来はこれらは別語と捉えなくてもよいかもしれない。そういう言葉には近似するあらゆる意味が含意されているということと重なっているともいえる。とはいえ、一覧にはあげなかったが、325は「浦近久 起秋霧者 藻塩焼 煙低而已曾 立亘芸留(うらちかくたつあきぎりはもしほやくけぶりとのみぞたちわたりける)」と

あって、「起つ秋霧」が後で「煙とのみぞ立ちわたりける」と冗長な言い回しになって同音反復的に繰り返されていることからすれば、掛詞であるともいえるし、同じ概念の語であるから繰り返せたともいえる。550などに「(植物が生えて)立つ(評判になり名が)立つ」の類もあるが、ここではのぞいた。

たまのを (「玉之緒」223・472)……命にかかるものとして、比喩的につかっている。

つむ (「摘(植物を摘む・人を抓む)」249)……同語の物象から人事への転換の用法なので掛詞とは認めない場合が多いが掲げた。「かたみ」と併用されている。

つゆ (「露(露・つゆ(副詞))」67)

とく (「泮(水)解く・(心)解く。人事の文脈を入れると「心がとける」を含む。)189「解(水)解く・(心)解く」412)

なかる (「流(泣)」227・229)……同字で書かれることが掛詞の原理であるとする根拠としてよく紹介される掛詞である(古今集・冬・59)など)。新撰万葉集では「流」の字で表記し、そこに「涙」などの縁語関係から「泣かる」の意味が掛けられていることが指摘できる。この掛詞が成り立っているということは、「流」から「流る＝泣かる」が連想されるという、和歌における掛詞の成熟が背後にあるか。それは仮名の同字で書かれていることによって視覚的に介するという言語理解の過程をすでに終え、和歌のルールとしてこの「掛詞」が成り立っている可能性を示唆するのである。

なく (「鳴(泣)」35・71・83・89・91・119・139・295・299・303・341・355・392)……すべて本集では「鳴」の字を使う。一般に掛詞と認め

られているが、漢字で表記されるとすべて動物・虫の行為としてのみ表面上にあらわれているようにみえる。ということは、動物や虫に託して人の心情を重ねている用法であり、その意味でいえば、掛詞としては認められにくい、人事文脈と物象文脈を重ねる詠み方と同じである。これは「掛詞とは何か」というテーマで掛詞の構造と形態を考える上では、重要な問題点になり得る。

なみだがは（「涙河（涙↓涙河）」227・474）……涙河を掛詞と認める注釈は皆無である。189、229のように初句に出てくる例があり、「涙河」という観念が先に歌世界に成り立っているといえる。しかしながら、227・474は三句目に「涙河」が出てきており、上接の文脈に対しては「涙」をきっかけに下の句に流れているので、掛詞的な用法になっている。文脈によって掛詞か否かが変わるのでしたら、掛詞とは、言葉に対する認定ではなく、文脈における、あるいは修辞における、語法における現象と考えるべきことになる。

ぬれぎぬ（「潤衣（衣服としての濡れた衣・ぬれぎぬ）」550）……掛詞というよりは「ぬれぎぬ」という慣用語の由来ともいうべきものであるが掲げた。

はかなし・さ（「葬処無（墓無し・儻し）」49、「葬無佐（墓無さ・儻さ）」71）……掛詞とは言いにくいかもしれないが、一見、付会の俗説にみえる掛詞説が八代集では詞書による指示や哀傷歌であることを以って「垂乳根ははかなくてこそやみにしかこはいづことてたちとまるらん」（後拾遺・雑五・1156）や「遅れゐて見るぞかなしきはかなさを憂き身の跡と何頼みけむ」（新古今・哀傷・840）において行われている。新撰万葉集は表記の上ではこれを用いていることは注意される。404は「葬処

砥（墓とか）」「むさは「葬処無雁介留」（儻かりける）」と「はか」に用いられる、表記にかかわった戯訓表記とも解釈できるが、一応ここに掲げる。この用法が新撰万葉集では一般的であったことを想定させる。

はかり（「量（許り・量り）」211）……仮名で書かれるなら、掛詞とはおもわれないだろうが、表記の上で「金」と縁語的に表れているため、掛けられていると判断できる。「懸都例者 千千之金裳 数知沼 何吾恋之逢量那岐」（かけつればちちのこがねもかずしりぬなにわがこひのあふばかりなき）。この歌は「あふ」に「逢（逢ふ・吊り合ふ）」も掛けられている。「千々の金」や「数」が一首中に詠みこまれているところから、「量」は縁語的に数量計算（あるいはそれに用いる秤）の意味を連想させる。それに合わせて「逢ふ」という恋の詞が、金銭的な意味での「釣り合ふ」の意味をも持ちうる。古今集以後の和歌とは題材の美的意識の点で体裁を異にしている。

はたて（「幡手（果たて・旗手）」381）……「はたて」の歌語は、古今集（恋一・484）にもみられるが、万葉集の用例によって、旧説「旗手」は否定され、「果たて」が正しいとされている。しかしこの表記は「幡手」。掛詞なのか、あるいは「旗手」が正しいと解釈されていたことも考えられる。

はる（「春（目も張る）」13）……古今集にも見られる（雑上・888）。ふる（枕詞「いそのかみふる」）（「磯之上 古（古・布留）」388）……掛詞に含める場合が多々ある。同じ「あしひきのやま」は掛詞と認められることが少ないが、構造上は同じであるにもかかわらずである。ほ（「帆（帆・ほ（秀）」117）ほにいづ（「穂丹出（穂に出づ・秀に出づ）」103）

まつ〔待（人）待つ・松虫〕536、「松（待）」317〕……他に355は「鳴秋虫」を「なくまつむし」と訓ずるのが一般的。掛詞として認めてよい可能性がある。528は「女郎花〓待つ（女〓待つ）」という観念の結合がみとめられるが、掛詞ではないのでここには掲げない。

みをつくし（身緒筑紫（身を尽くし・漣標）446）……和歌でよく用いられるこの用法は、新撰万葉集にも一首みられる。注意すべきはその表記であり、「筑紫」と書いていること。「尽くし」に「筑紫」を連想させる用法がわずかながら後世にある。『後撰集』（雑一・1103・大江玉淵朝臣女）に「女ともだちのもとに、筑紫より挿し櫛を心ざすとて」の詞書で「難波濁何にもあらず身をつくし深き心のしるしばかりぞ」とあり、『落窪物語』の冒頭の和歌に、文脈に関係なく「日にそへてうさのみまさる世の中に心づくしの身をいかにせむ」（うさに憂さ・宇佐）と「尽くし・筑紫」が掛けられている例があつて、平安朝ではその後も発想として受け継がれてことがわかるが、古今集の注釈で「つくし」に「筑紫」を掛けたと認め得るものはない。仮名で書かれているものではそこまで読み取れず、文脈からも判断できないためである。

もゆ（燃（螢が光り）燃ゆ・（氣持ちが）萌ゆ）98）……本来は同語だが意味が分化し、一般には掛詞とというる例。そのため、物象と人事の重ねの用法ともいえそうである。

やま（枕詞「あしひきのーやま」（足弾之山（不明・山ほととぎす）53、「足曳之山（不明・山）410）……これを掛詞と認めることは皆無で、枕詞からの接続と一般に解釈されるが、ここでは掛詞とは何かを捉え直す目的もあるため、あえて含めた。前に挙げた「いそのかみ」を枕詞に「ふる」を導くものと、形態上は同じである。53は「山」が「山郭公」

に繋がっているので、「山」は結節点となっており、その意味でいえば純粹に掛詞といえる。

ゆく（往（冬の風の）行く・（旅）行く）428、「往（雲が）行く・（人が）行く」500）……これも物象と人事の重ねの用法の一種なので、掛詞とは認定しない可能性が高いが、ここに載せた。428は旅中の独寝を思わせる。

よき（斧（避き）123）……「石目「叢斧棲」（新編国歌大観…くさむらかけず）を契沖全集では「くさむらよきす」としている。勅撰集（金葉・秋・249「山守よ」）にこの掛詞の例があることからすれば、「よきす」と訓じ、掛詞と認めるべきように思われる例である。ただし斧が出て来る必然性が表記以外に見出しがたい。

をみなへし（物名）（緒皆歴知」516、「緒皆歴知」554）……516は契沖全集の訓「あきの□をみなへし」としてによる。その訓でなければ、女郎花がどこにもあらわれないことになるからである。物名は狭義の掛詞に含めないが、広義の掛詞には含めて考察する研究も多いので含めた。「物名の出現は仮名の発達とかかわっているとされるが、「をみなへし」に対して訓も交えながら同じ表記をしていることからすると、物名の中には音訓交えたものがあつた可能性を示唆するわけで、その上、このような書き方が既に様式としてあつたことすら想定させる。

その他……新撰万葉集では掛詞とはいえない例だが、言及しておく必要のあるものに「そよ」（曾与「101・317）がある。「そよ」とは風になびく擬音の「そよ」であり、許諾の返事としての「そよよ」の意の掛詞になることが多い。古今集にもみえる（恋二・584）。二例とも同じ音仮名

の字で書かれていることは、掛詞が同字を原理とする説の根拠ともなるが、二例のみであるのと、新撰万葉集では掛詞でない点が注意される。漢字では表しにくい概念であったということが考えられるが、二例とも同じ表記ということは、掛詞の「そよ」を書く時にもこう書記するのが一般的であった可能性が背後に浮かび上がって来る。こういう在り方は（物名だが）「をみなへし」に共通する（ただしそちらは一字一音の仮名表記ではない）。

五、結語

分析の結果、訓を介していることよって掛詞と認め得る例が大半であった。つまり同字であることだけが掛詞の原理とはいいがたい、多様な掛詞の在り方をうかがわせるものが、古今集と同時代にはあるということである。だが、いくつかの例において、掛詞がすでに観念として成り立っているように思われるものがあることは、注意を要する。つまり、同字で書かれるか、同音であるかは問題となっておらず、ことばに対する観念の結合が既に八〇〇年代末には成り立っているということである。そう考えると、古今集における掛詞の歴史までの間に、既に掛詞は使い古された表現となっていたことも背後に考えられてくる。

古今集では小野小町に多くの掛詞表現がみられること（彼女が仁明天皇時代に仕えていたという伝承さえある）からすれば、仮名の発生というものを経過せずとも成り立つ掛詞は一考する余地があるのであり、史料の少ない平安前期の歌を考える時、新撰万葉集はそれを考える端緒となるであろう。真名で書かれた掛詞表現の分析・研究が進展するならば、万葉集の

掛詞表現と、本歌集の掛詞表現とのかかわりも明らかとなり、その延長での古今集の表現の在り方も自ずと明らかとなるはずである。それは上代から中古の歌に継承された部分を解明することに外ならない。仮名の発展というひとつの視点に囚われるのではなく、複合的な観点から表現を分析していく必要がある。